



「相手のことを知ろう」

高岡市立高陵中学校 1年 大野 芙瑠琉

小学生の頃、日系ブラジル人の男の子が同級生たちに「ブタジル」「消えろ」などと言われていじめられているのを見たことがある。だが、そのときは男の子をかわいそうに思うだけで、そこまで気にもしていなかった。

私の学校には、この男の子のように、外国人やハーフの子が何人かいる。実際私も日仏ハーフであり、複数の国の血を引く〈ミックス〉でもある。以前はあまり気にもならなかったが、最近、他のハーフの子などが同級生に陰口を言われている光景を目にし、なぜ外国の血を引いているだけでさげすまなければならないのか、疑問に思うようになった。私自身、会話も交わしたことがない人に「国へ帰れ」と中傷され悲しく思ったことがある。

そんな中、私は昨年、祖国フランスを訪れた。そこには様々な肌の色の人や人種の違う人がいて驚いた。しかし、私が一番衝撃を受けたのは、たまたま乗った地下鉄の中での出来事だった。薄汚れた服を着た子供連れの男性が「お恵み下さい」というカードを配りながら物乞いをしていたのだ。母が言うには、フランス以外の国からの移民らしかった。私は財布を取り出そうとしたが、母に「切りがないよ」と止められ、結局無視することにした。だが、しょんぼり去っていく男性の姿を見たとき、私はとても後悔した。お金をあげなくても、せめて「頑張って生きて下さい」と声をかけてあげればよかったと思った。もしかすると、その人にとっては、お金を恵んでももらえないことよりも人々にさげすんで見られることの方が辛かったのかもしれない。

このときの体験から、私は自分の中にも差別意識があることを感じ、なぜ皆が外国人やハーフ、特に貧しい国の人々をいじめるのか、理解した気がした。多分、自分よりも下の人間だと見下しているのだ。なぜ、同じ地球に暮らす人間として対等に接することができないのだろうか。なぜ、いがみ合ったり、上下関係を生み出したりしなければならないのか。母に聞いてみると、〈無知〉や〈無理解〉から来ているのではないか、ということだった。相手のことを知らなければ、自分を優位で安全な立場に置いて、相手をさげすんでいられるのだ、と。私に「国へ帰れ」と言った人も、私をよく知らないからこそ、悪口を言えたのかもしれない。大切なのは、相手のことを知ろうとし理解を深めることではないだろうか。

私はこれから、様々な国や人々のことを知りたい。特に、貧困に苦しむ国の人々に対しては、「知らない」「関係ない」で済まさず、積極的に理解し、支援していきたい。今は未成年なので大きなことはできないけれど、まずは、これまであまりしていなかった募金をしたり、使わないまま家に眠っている文房具を開発途上国の人々に送ったり、学校でのペットボトルのキャップ集めに進んで参加したりして、活動を広げていきたい。そして将来は、〈ミックス〉として様々な国や人と関わり、協力できるような人生を歩みたいと思う。